

# マザリナード・プロジェクト

## —人文科学研究の新しいコーパスを考察する—

一 丸 禎 子

### 論文要旨

本論は学習院大学から申請した科学研究補助金（平成 20 年度）によりデジタル化されることになった日本の「マザリナードコレクション」をインターネット上で次世代型の人文科学研究のコーパスとして構築するための方法を考察する。初めに近年の人文科学研究をとりまく Web 環境の例として、フランス語圏の電子図書館、研究用サイトの歴史的発展の経過を分析し、新しい技術を応用して、より開かれた形態での共同作業が今後の人文科学研究を活性化することを確認する。つぎにその分析結果を生かしつつ、具体的事例として「マザリナードコレクション」をコーパスとして Web 上に公開することの意義および人文科学研究への貢献を考察する。

**キーワード**【インターネット、コーパス、電子化、マザリナード文書、人文科学研究】

### はじめに

2008 年、この夏、紀元 4 世紀ごろに書かれた世界最古のギリシャ語聖書、シナイ写本が Web 上で一般公開された。全体が公開されるにはまだ一年ほど待たなければならないが、このたびの公開が成し遂げられたことは、人文科学研究の環境に大きな歴史的変化が起きたことを記すひとつの指標となるだろう。

シナイ写本は 19 世紀にエジプトのシナイ山にある聖カタリナ修道院で発見されて以来、イギリス、ドイツ、ロシア、エジプトの 4 カ国に分散して保管されてきた。修道院は返還を希望しているが、ひとたびこのように分散したものを元に戻すことは現実問題として不可能に近い。ひと世代前の研究者であったなら、その全体像を見ることなど永遠にかなわぬ夢にも等しいといったであろう。だが、今日のインターネット環境と最先端のデジタル画像技術は、Web という仮想空間においてそれを現実にしたのだ<sup>1)</sup>。

しかし、このプロジェクトが注目される理由はそれだけではない。重要なのは、この仮想空間の「シナイ写本」がどのような姿で私たちの前に現れたかということである。それは写本のデジタル画像、ギリシャ語テキストを転写した電子テキスト（そこには筆写の修正部分

も同時に再現されている)、そして英語・ドイツ語の翻訳等から構成される<sup>2)</sup>。電子テキストの単語をクリックすると、写本の該当箇所が赤い枠で示され、さらに将来的には他の写本の電子テキストとのリンクも予定されているそうだ<sup>3)</sup>。つまり、図書館や博物館でガラスのケースに入れられ、閲覧に供するというよりは単に並べ置かれているだけのテキストとは異なり、この Web 上の「シナイ写本」にはテキスト内部の探訪へと積極的に誘うさまざまな仕掛けがなされているのである。写真やマイクロフィルムやファクシミリ版などに限定されていた従来の資料の「複製」に比べたら、なんという進化だろう。

1991 年に世界最初の Web サイトが立ちあげられてから、インターネットがつくりだした仮想空間における情報の共有は、今、明らかに次の段階に入っている。前述の「コデックス・シナイティキウス・プロジェクト」Codex Sinaiticus Project に見るように、資料体は Web 上でよりたやすく集合しうる。言い換えるなら、これまで物理的に離れたところにあった資料が、所有する施設や機関の壁を越え、国境さえ飛び越して、コーパスとして再編されうるということだ。

いやむしろそれは再編などではなく、今ようやく人文科学研究のための本来の意味でのコーパスの構築に近づいたというべきかもしれない。なぜならコーパスとはテキストや資料の単なる集まりを指すのではなく、基本的には研究者がその中身を検索し、分析に必要なものを抽出できるような環境におかれた資料の集合体であるからだ。最も先端的な言語学の電子コーパスが言葉の収集に特化されているために、コーパスといえば言語資料に限定されるような印象を与えるが、実際には人文科学研究に供される場合、その専門分野によって文章などの言語テキストに限らず、映像や音響なども含めてひとつの資料コーパスを構築することが可能である。中心となる資料を中心に、関連する論文、隣接する項目に拡大し構造化するならば、そのコーパスは限りなくアーカイヴにも近づいていく。両者の境界もまた今、ネット空間では曖昧になりつつあるのだ。

いずれにせよ新しく人文科学研究用のコーパスがインターネット上に構築される場合、共通して次に述べる 4 つの潜在力を秘めることになる。ひとつには分散した資料をひとつにまとめる、あるいは希少性の高い資料へのアクセスを容易にするなど、研究者にとって閲覧の利便性を著しく向上させる。また情報工学の賜物である強力な検索プログラムによって研究者の分析を助け、従来と異なった視点からのアプローチを可能にする。さらにその結果を瞬時に反映・共有できるので、研究者間のコミュニケーションを活性化し、ひいては研究活動を加速することにつながる。そして何よりその成果をいち早く一般に公開し社会に還元することができるのである。

本論では、人文科学研究に携わる私たちが今、ネット上でどのような研究環境にいるのか、具体例としてフランス語圏の研究サイトの現況を概観し、次にこうした環境において、新しいコーパスの構築方法としてはどのような可能性があるのか「マザリナード文書」をコーパ

ス事例としてとりあげ考察を展開する。

## 1. 人文科学研究をめぐるネット環境（フランス語圏研究サイト）

### 1-1 電子図書館

フランス国立図書館（BNF）は、2008年3月、パリのブックフェアで新たな電子テキスト化計画「Gallica 2（ガリカ・ドゥー）」を公開した。「大規模デジタル化計画」とも呼ばれるこのプロジェクトは、年間100,000作品のデジタル化を目標とし、週単位では2,500のドキュメントをWeb公開する予定で、2010年までに400,000冊、60,000,000ページの電子テキスト化を達成しようというものだ。特筆すべきはまず驚異的なその量である<sup>4)</sup>。

この計画は先行する書籍検索サービス「Google ブック検索」（2004年公開）を意識したものであるのは明かだ。「Google ブック検索」はデジタル化した書籍を著作権保護期間が過ぎているものは全文、保護されているものに関しては一部公開とし、その場合には、むしろプレビューとして広告的な価値をもたせ、販売の促進に貢献している。したがって、図書館のような完全な公共サービスとはいえない。だが、テキスト内の語彙検索やPDFダウンロードなども可能で、最近では大学や図書館との連携も広がっており、実質的にはWeb上の電子図書館として機能している<sup>5)</sup>。さらに図書館のオンライン蔵書目録と異なり、タイトルだけでなくテキストもキーワード検索の対象になる。実際、その検索力には驚かざるをえない。それはこの書籍検索サイトが登場するはるか以前に電子図書館の構想をかかげた「プロジェクト・グーテンベルグ」Project Gutenberg（1971年）が従来の図書館の形式（電子書籍の収集、目録と閲覧サービスの提供）にとどまっているのとは好対照をなす<sup>6)</sup>。それだけでなく「Google ブック検索」では書籍に関する周辺情報を「人気のある引用」「ウェブページからの参照」などのコンテンツとしても提供している。その参照は前述のBNFによる電子テキストのページにも躊躇なくリンクを張る。「Google ブック検索」はWeb全体をあたかも巨大な書庫のように見なし、検索の限りをつくす。だが、そこには情報を保存し、整理し、管理するという考えが最初から排除されている。そこにあらわれるのは、毎回検索をかけるごとに瞬時に集められては散ってゆく情報の束にすぎない。翌日、あるいは数時間後に同じ検索結果を得られるかどうかの保証もないのだ。「実体はない」という意味でまさしく仮想のアーカイヴなのである。

一方、BNFの場合は、まず最初に国立図書館に課せられた6つの使命「図書館の蔵書を豊かにすること、その保管、および一般への公開、目録の作成、国内外の他の機関との協力、研究活動への参加」がある。テキストの電子化もこの任務の一環として行われ、閲覧の利便性を高めるための公共サービスとして位置づけられる<sup>7)</sup>。2007年11月9日現在の数字で、電子化された著作は95,000点、そのうちテキスト・データになっているものは2,600、画像

データでは250,000点である。これらのうち、パブリックドメインに帰したものをBNFではWeb上で公開している。1997年以降、そのためのサーバーの名称Gallica（ガリカ）をBNFではネット上で提供する電子図書館サービスの総称としている。

Gallicaはまず第一に国の文化遺産の百科全書的コレクションとして構想されている。歴史、文学、自然科学、哲学、法律、経済、政治学と幅の広い領域を覆う。書き物（本、雑誌、新聞、譜面）、画像（版画、絵葉書、写真）、さらに音源を資料とする。インターネットという遠隔地においてもアクセスできる環境であるからこそ、希少性の高いもの、閲覧の難しいものを優先して提供していく。その一方で、デジタル化により、物理的に存続の危機にある資料の保存にも貢献する<sup>8)</sup>。この新たなコレクションを構成するにあたり、Gallicaは現実存在する複数のコレクションに依拠している。特徴的なのはそこで網羅的であるよりも「選別的」であることを基本姿勢として掲げていることだ。それは12のテーマごとにまとめられた「ドシエ」dossier——そこに「ガリカ・クラシック」Gallica Classique（フランス文学の古典的な作品を年表など他のコンテンツとともにデータベース化したもの）、「アメリカにおけるフランス」、「イタリア旅行」、「ヴォルテールの図書館からロシア国立図書館へ」などが含まれる——によくあらわれている。このように「選ぶ」「選別」することに意識的になる背景には、フランスの国立図書館が歴史的には研究者の利用を前提としてきたことに由来する。1996年に新しい建物に移るまでのBNFでは一般の利用が制限されていた。電子図書館の構想はフランスの文化遺産をより広く一般に普及・伝搬するためのものでもある。言い換えるなら、その背後にはこれまでに蓄積されてきた知の中から選りすぐったものを一般に提供するという自負があるのだ。BNFによるガリカ・プロジェクトの説明には「コンテンツ」に相当する言葉は使われない代わりに、「コレクション」collectionあるいは「コーパス」corpusという表現が頻繁に用いられるのもそのためである。つまり知識としてきちんと整理され、体系化された情報が提供されているということだ。

## 1-2 文学研究サイト

### 1-2-1 第一世代の研究サイト；Gallica（1997年）以前

インターネットの出現と同時に、新しい技術を研究に導入する試みはさまざまな場所で始まった。1990年代の前半に立ちあげられ現在まで「老舗」として残っているサイトに「ABU（アブ）」<sup>9)</sup>と「ATHENA（アテナ）」<sup>10)</sup>がある。ABUは1993年の世界愛書家協会l'Association des Bibliophiles Universels設立以来、没後70年が経過して著作権の切れたフランス語圏のテキストをデジタル化し公開する活動をしている。その活動を支えるのはボランティアで、テキストをスキャナーにかけ、OCRで読み取り、原著と突き合わせる作業にはいろいろな国の人が関わっている。「パブリックドメインの電子化したフランス語テキストによるできるだけ大きなコーパス」を提供することが目的だ<sup>11)</sup>。一方、ATHENAは1994年に個人が開

設した。最初はほとんどピエール・ペルー Pierre Perroud の不眠不休の努力に支えられていたが、現在は多くの協力者がスキャナーでの読み取り、テキストの校正などで参加している<sup>12)</sup>。いずれもテキスト・データベースの形態をとっており、一般に公開されている。

これらのサイトとは別に、フランスには研究者用のテキスト・データベース「Frantext (フランテキスト)」<sup>13)</sup>がある。利用するには登録が必要で、一般には公開されていないが、インターネット上の研究環境の歴史においては重要なサイトである。Frantext は『TLF 辞典』<sup>14)</sup>の編纂のために作られたデータベースだ。情報工学を駆使し辞書編纂用言語コーパスを構築する計画は 60 年代に着手された。あくまで辞書を作るためで、公開を前提としていたわけではなかったが、80 年代に電話回線でアクセスできるようになり、1992 年からインターネットで接続できるようになった。一般には公開されていないといったが、『TLF 辞典』が 2004 年から Web 上で公開されているので<sup>15)</sup>、この辞書を利用するときは Frantext のデータベースを使っていることになる。

第一世代の研究用サイトは「まず新しい技術を使ってみよう」という実験的な試みに始まり、テキスト・データベースの量的拡大に集中した。コーパスの形態も語彙検索や頻度などを中心に言語学のコーパスをモデルにしているのに対し、インターネット環境の発展とともに「新しい技術を使って何をどう表現するか」、サイトのデザインに向かっていく。またサイトの種類も 1990 年代後半から増加し、2000 年を超えると加速度的に新しいプロジェクトが展開し始める。公共図書館のカatalogのオンライン化が進むのも同時期である。

### 1-2-2 第二世代の研究用サイト：Gallica (1997 年) 以後

よりたくさんのテキストを集めて、より大きなテキスト・データベースを作ろうとする試みのあとに、人々が関心を向けるのは、作家や作品を中心に据えたサイトである。作家の記念館、あるいは研究者グループ、まったくの個人が次々にサイトを開いていく。それらは必ずしも学術的な研究の反映とはいえないけれども、サイトのデザインを考えることは必然的にコンテンツの内容を取捨選択することにつながり、運営者の関心の深さに比例して研究用サイトに近づいていく。たとえば、19 世紀の小説家オノレ・ド・バルザック Honoré de Balzac (1799 - 1850) の記念館でパリ市が所有するメゾン・ド・バルザック Maison de Balzac のホームページ<sup>16)</sup>は、2003 年に作品の語彙のコンコルダンス<sup>17)</sup>を、続いて『人間喜劇』*La Comédie humaine* (1842 - 1855) の初版<sup>18)</sup>に解説や研究論文を加えてテキスト・ファイルで公開することにより、単なる歴史的建物の紹介に終わらず、学術的な付加価値をもつことに成功した。これらのコンテンツをホームページに載せることを強く推したのは、バルザック研究の第一人者であるパリ第七大学のニコール・モゼ Nicole Mozet である。また、コンコルダンスの作成者は埼玉大学の霧生和夫である。このコンコルダンスは最初に『人間喜劇』の語彙をおさめたものができ (1989 年)、対象作品を広げつつ、1996 年にニース大学のエチ

エンヌ・ブリュネ Étienne Brunet によって実験的に語彙統計学的研究のために Web で公開され<sup>19)</sup>、さらに完成した形でメゾン・ド・バルザックに提供された。その道筋はちょうど第一世代の研究サイトから第二世代のサイトへの移行をそのままどっているのである。

あるいはアレクサンドル・デュマ Alexandre Dumas (1802 – 1870) のように、先に CD で出版された内容をもとに Web サイトがつくられる場合もある<sup>20)</sup>。アレクサンドル・デュマの会 Société des Amis d'Alexandre Dumas によって運営されるサイトは、『三銃士』*Les Trois Mousquetaires* (1844) や『モンテ・クリスト伯』*Le Comte de Monte-Cristo* (1845 – 1846) などのような有名な作品はもとより、手に入りにくい作品のテキスト・ファイル、伝記的事実や他の作家がデュマに関して言及しているテキストの引用、デュマが建てたモンテクリスト城や作家自身の肖像、映画化された作品の紹介などの画像ファイルも豊富で、1998 年の公開以来、たびたびメディアにも取り上げられている<sup>21)</sup>。これからも長編作品の要約や解説をどんどん増やしていく方針である。もともとこの会は 1971 年に崩壊の危機に瀕していたモンテ・クリスト城を救うために設立された。城をシンポジウムなどの文化活動の拠点として運営し、デュマの作品と人生にかかわるものを収集することも目的のひとつとしており、サイトの内容は今後もさらに豊かになっていくものと思われる<sup>22)</sup>。

メゾン・ド・バルザックにせよ、デュマの会にせよ、現実の活動があつてその成果が Web に反映されている場合、サイトの内容は充実し順調に発展していく。それは絶えずページが更新されていく要素でもある。

以上の 2 つの例は一般的で古典的なサイトだが、2000 年に入ってさらに発展した新しい形態のサイトが登場している。その中でも著しい成長を見せているのがギュスターヴ・フロベール Gustave Flaubert (1821 – 1888) の草稿研究のサイトである<sup>23)</sup>。ルーアン大学に置かれたル・サントル・フロベール Le Centre Flaubert が運営している<sup>24)</sup>。2001 年に開設、2003 年に『書簡』*Correspondance* (1830 – 1880) を電子テキスト化、2004 年から『ボヴァリー夫人』*Madame Bovary* (1857) の手書き原稿からの転写を順次公開し、2008 年転写が終了するまでの過程を含めたページ「アトリエ・ボヴァリー (Atelier Bovary)」として公開している。引き続き、フロベールが残した蔵書への書き込み、他の作品のデジタル化を予定しているが、もっとも野心的な試みは、書簡、伝記的事実、フロベールの蔵書、注解、草稿を統合したデータベースを構築する「イベル・フロベール (HyperFlaubert)」計画である。

フロベールのサイトの大きな特徴は 2 つある。ひとつはそのサイトの構成であり、もうひとつは仕事の仕方である。このサイトの核になるのは、デジタル化されたフロベールの手書き原稿と転写したテキストの公開である（「ボヴァリー・プロジェクト (Projet Bovary)」）。しかし、それだけにとどまらず、「リンク」によってオンラインで公開されている他のサイトの作品や草稿の電子テキストへつなげていく。同様にコンテンツとして作家の伝記的事実に関する記述、写真資料、研究論文、参考文献表、博士論文、中等教育用の

資料、映画など別のメディアによる表現、外国語翻訳などを、他のページとの積極的なリンクによって充実させている。フロベールについて研究しようとするならばまずこのサイトにアクセスするのが最も効率がよい。的確な情報を選択し、特化しつつ網羅化するこのサイトは、それゆえフロベール関連の研究情報の網の目において、中心であると同時に入口になるという特権的な地位を獲得している。

さらにこのサイトの構成として特筆すべきなのは、研究者に対するのと同様に一般の人にも開かれていることだ。それは単に公開されているという意味ではない。質問コーナー「question / réponse」には専門的な問いから一般読者の素朴な疑問までさまざまな質問が寄せられる。一例をあげれば、『サランボー』*Salammbô* というフロベールの小説のタイトルと同じ名前の娘をもつ女性が投げかける「このタイトルになっている名前の由来を知りたい」という問いに対して、草稿からの引用を含めて詳細な答えが書き込まれている<sup>25)</sup>。専門的な研究者と一般の読者との交流は双方にとってたいへん有意義なことである。素朴な疑問は時に根源的な学問的な問いであることもしばしばである。また専門外の人からの指摘が未発見の資料につながることも考えられ、研究活動を活性化させる。その一方で研究の成果が一般の人にも共有されることにより、教育的な効果も期待できるからだ。フロベールのサイトは、研究サイトであると同時に教育的サイトであることを十分に意識している。『ボヴァリー夫人』の草稿の転写は、画像と転写されたテキスト・データが表示される研究者用ページ「シット・ボヴァリー (Site Bovary)」(現在準備中)と、画像はなく、そのかわりにさまざまな教育的コンテンツを備えた「アトリエ・ボヴァリー」という高校生や大学生向けのページと2種類の公開方法を準備している。

Web上の研究サイトの場合、このように「一般に開く」ことが容易であることはきわめて重要な点である。それは教育的効果をもつだけでなく、確実に研究の活性につながる。フロベールのサイトではこの「一般に開く」という試みを、仕事の方法の中にも大胆に取り入れている。以下に述べるフロベール・サイトの作業分担は、本論でこの先に検討する私たちの「マザリナード・プロジェクト (Projet Mazarinades)」の推進においてもひじょうに参考になると思われる。

『ボヴァリー夫人』の草稿転写の計画はその発端から経過まで「アトリエ・ボヴァリー」の中で詳しく説明されている<sup>26)</sup>。1914年にフロベールの姪から寄贈を受けて手書き原稿を所有するルーアン市立図書館は、2003年、きわめて高画質の画像ファイルを作成、テキスト・ファイルにするための転写をルーアン大学に依頼した。プロジェクトの責任者となったダニエル・ジラルド Danielle Girard とイヴァン・ルクレール Yvan Leclerc は、4,546枚におよぶ膨大な量の転写を効率よく進めるために、一般に呼びかけた。この呼びかけに応じて参加した人の国籍はヨーロッパだけでなく、アジアから日本、タイ、オセアニアからニュージーランド、アフリカからガーナ、南アメリカからコロンビアなど地球上のあちこちに広が

る 16 カ国だった。年齢は 16 歳から 76 歳まで。職業もフロベールの研究者から、大学生、高校生、レントゲン技師、石油採掘者、美術史の専門家、物理学教授、図書館司書、精神科医、家政婦など多種多様であった。個人で参加した人々のほかに、高校のクラス単位での参加が 16 校あり、延べ人数にすると大変な数のボランティアが集まったのである。この人たちの名前はすべて「アトリエ・ボヴァリー」に掲載され、名前をクリックすると自己紹介と共にとどの部分の転写を分担したかが示される<sup>27)</sup>。まったくの「素人」を動員することに対する批判がなかったわけではないだろうが、この人海戦術により転写作業は 2004 年 3 月から 2006 年 9 月の二年半という驚くほどの短期間で終えることができたのだ。時間の短縮もさることながら、結果的に、作家の草稿に「直接」触れることができた体験は参加した人々に知的興奮を与えずにはおかなかったであろうし、それは文化活動の刺激につながる。とりわけ高校生の参加は自国の文化遺産への理解を深めることにつながるであろうし、海外からの参加もまたフランスの文化の普及に貢献することになるだろう。ボヴァリー・プロジェクトが作業の段階から一般の人々に公開したことはたいへん勇気のあることであり賞賛に値する。

こうした作業方法はインターネット環境がなければ考えられなかった方法論である。基礎的な作業を効率よくこなすだけでなく、作業自体が文化活動にもなる。しかし、研究者以外の人々に協力を求めるにあたっては、全体の作業を統括し、かつ仕事の段取りと分担をしつかりと計画する研究者による準備が必要だ。ボヴァリー・プロジェクトは、フロベールの草稿をこれまで保存し、デジタル化に踏み切った図書館、委託を受けて周到に準備しプロジェクトを実行に移した大学の研究者、知的冒険への呼びかけに応じた一般市民の三者がそれぞれの役割を果たしたことにより、転写の終了という結果だけでなく、それ以上の成功を見せた例である。このサイトではさらに 4 つの計画が企画されているがいずれも外部に開かれ、協力者を募っている。この方法が定着すれば、人文科学研究のコーパスの構築には従来とはまったくちがった方法が導入されることになるだろう。

インターネットがもたらしたさまざまな利便性は、私たちの研究環境を劇的に変化させている。利便性のなかでも、とりわけ入手困難なテキストの再現と普及はネット環境の得意とするところである。そうしたサイトの中で傑出しているのが 17 世紀バロック小説の傑作『アルタメヌ、あるいはル・グラン・シリユスの物語』*Artamène ou le Grand Cyrus* (1649 - 1653) の再現のためにつくられたサイトである<sup>28)</sup>。この作品は初版が 13,095 ページあり、フランス文学史上最も長い小説といわれている。全 10 巻で、並べると 50 センチにもなるこの小説は読むだけでもたいへんだということは容易に想像がつくが、その上に 400 人近い登場人物と入り組んだ筋がたいへんわかりにくい。そのためにこの時代の重要な作品（同時代人に多く読まれ、版を重ね、外国語にも翻訳された）にもかかわらず、研究者にもほとんど読まれていなかった。仮に意を決して読もうと思い立った研究者がいたとしても、テキストを手に入れることがそもそも困難なのだった。



それゆえ「アルタメヌ・プロジェクト (Projet Artamène)」ではまずインターネット上でアクセスできるテキストの再現が一番目の課題として掲げられている。このサイトでは電子テキストが5種類フォーマット (HTML、PDF、Word、テキストスタイル、eBook) から選んでダウンロードできるようになっている。次にテキストが再現されても、同時代人でもない限り読みこなすことが困難なこの作品を読みやすくするための工夫をすることが二つ目の課題となる。そのためにこのサイトでは、膨大なテキストに語彙とページで検索がかけられるようになっている。また各巻の要約 (短いものと、さらに詳しくして引用文を加えたものの2種類) があり、解説があり、地図があり、さらに詳しく研究したい人のために参考文献表も用意されている。これらの工夫によって「同時代人と同等のレベルでの読解」へ導くことを目指している。そしてさらに、このサイトをきっかけとして、この作品が書かれた当時の一連のバロック小説を同時代のテキストの総体との関連において考察するところへ導きたいと考えているのである<sup>29)</sup>。

スイス科学研究基金 Fond National Suisse de la Recherche Scientifique の研究補助金を受け、ヌーシャテル大学 Université de Neuchâtel の近代フランス文学研究所 Institut de Littérature Française Moderne においてクロード・ブルキ Claude Bourqui とアレクサンドル・ジェファン Alexandre Gefen が中心になってチームを率いたアルタメヌ・プロジェクトは2005年に一般公開された。一言でいえば、これは巨大な校訂本である。しかし、これが紙を支持体にした計画であったなら、おそらくどの出版社も躊躇しただろう。仮に実現したとしても、個人が購入するのは不可能だったはずである。大量の情報を扱うことにすぐれたネット環境があったからこそ実現にいたったといえる。この「校訂本」の出現により、350年近く前の小説がよみがえった。同時に、同時代人の受容によりいっそう近づこうという努力の結果、逆説的だが、この計画は文学作品の新しい技術による新しい受容形態を生み出したのである。アルタメヌ・プロジェクトの例に見るように、Web環境は既存のコーパスにも新たなアプローチを展開する可能性を示している。言い換えるならそれは、新しい発見に結びつく可能性なのだ<sup>30)</sup>。

### 1-3 コーパスを Web 環境に置くことの利点

以上の概観と分析に基づいていえば、新しい技術を用いて Web 上に研究用コーパスを構築することは、今後の研究の発展を考えるときわめて重要な課題になることが明らかだ。ここに挙げた例からその利点を整理してみよう。

まずコンピュータの利用によって、大量の資料を一度に扱えるようになる。そして、テキスト、写真、音声など支持体の違う資料もデジタル化することによって一元的にならべて扱うことができるのである。結果としてコーパスに組み込む資料の種類が飛躍的に多様化する。言い換えるならそれは、研究の領域を拡大することにつながる。

次にインターネットというコミュニケーションの手段は資料へのアクセスを目覚めしく向上させる。アルタメヌ・プロジェクトのように入手しがたい資料を閲覧することができるようになる。また、冒頭に挙げたコデックス・シナイティキウス・プロジェクトの例に見るように、分散している資料体を復元することも可能だ。研究者は空間的・時間的制約から解放されるだろう。同時にそれは原資料の保存にも貢献する。世界に一点しかない貴重な文献などは閲覧のたびに劣化することを妨げられるのだ。

また資料を編纂してひとつのコーパスとする場合も、仮想空間においてなら容易である。シナイ写本のように元のようにひとつにして復元するケースばかりでなく、フロベールのサイトの例に見るように、一人の作家について資料を集める場合にも、すべてが一か所にある必要はない。たとえば『ボヴァリー夫人』の手書き原稿はこのサイトが公開しているが、同じフロベールの作品である『感情教育』*L'Éducation sentimentale* (1869) の原稿はイギリスのハル大学 The University of Hull のサイトにある。リンクを張ればコーパスの一部は形成されることになる。こうした連携は専門の研究者間の交流を活発にするはずだ。それぞれが自分のプロジェクトに専心しつつ、他のプロジェクトに協力することができるのである。

インターネットが与えるコミュニケーション能力は、研究の成果を迅速に公開することに役立つだけでなく、とくにフロベールのボヴァリー・プロジェクトが成功させたように専門外の人々にも研究の一部に協力してもらうことを可能にする。これはすでに述べたように、研究者の作業を進める助けになるだけでなく、多くの利点をもたらす。参加する人々にとっては研究の最先端を体験する知的な冒険になると同時に、コーパスになっている文化遺産をよりよく理解することにつながるからだ。そしておそらくもうひとつの可能性をここに付け加えておくべきかもしれない。そこには専門外の、別の分野の研究者が参加する可能性が秘められているのだ。ボヴァリー・プロジェクトの草稿を転写した人々の中に、さまざまな職種の人が交じっていたことを思い出してほしい。隣接する研究分野であっても、未知の領域に接近するのはためらわれる。だが、一般の人と一緒にならば心理的負担は少ないのではないか。社会学者が歴史学者のコーパスに、医学者が文化史のコーパスに、哲学者が音楽のコーパスづくりに参加してもかまわないのである。そこに発見があれば、学際的な研究に発展するかもしれない。一般の人の参加はじつは異なる専門の研究者の間にも交流のきっかけを生む鍵なのである。

以上に述べたことは、一般的な、つまりどのコーパス作りにも共通していえる利点だが、新しいコーパスを作ろうとするときには、その資料体の性質によって、具体的に調整していかなければならない。次にひとつの事例として、17世紀フランスの重要な歴史的文書を取り上げて実験的に考察する。

## 2. マザリナード・プロジェクト (Projet Mazarinades)

### 2-1 「マザリナード文書 (Les Mazarinades)」とは<sup>31)</sup>

基本的な事柄であるが、言語使用の実態を調べるためのコーパスなら、できるだけたくさん  
の用例があった方がいい。だが、コーパスは必ずしも資料が多ければ多いほどいいという  
わけでもない。何よりも、資料の範囲を明確にしたうえで、研究目的にとってその内容が適  
切であるかどうかを明らかにしておくことの方が重要である。しかし、時には好むと好まざ  
るとにかかわらず、対象となる資料が膨大にならざるを得ない場合がある。「マザリナード  
文書」の場合がそれにあたる。

マザリナード文書とは、フランスの絶対王制が確立する直前に起きた内乱「フロンドの乱」  
La Fronde (1648 - 1653) の時期に印刷されたり、手書きで流布した政治文書のことである。  
現存するマザリナード文書の種類は5,200 から 6,000 といわれる。後者の数字は手書きを含  
めた数である。しかし、この数字は常に近似値で、正確な数はわからない<sup>32)</sup>。なぜならこれ  
らの文書は、パリのマザリーヌ図書館 la Bibliothèque Mazarine<sup>33)</sup> のコレクション (12,000  
から 12,500 点) を筆頭に、国内外に大小さまざまなコレクションとして存在するからだ。  
たとえばフランス国内では、フランス国立図書館アルスナル館 L'Arsenal (337 巻のコレク  
ション、おそらく 15,000 から 20,000 点)、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館 la Bibliothèque  
Sainte-Geneviève (120 巻の大型製本) 等のコレクションが有名であり、国外ではヴァチカ  
ン市国やドイツ、ロシアなどが大型のコレクションを有している。個人のコレクターが3,000  
点を超すコレクションをもっている場合もあり、この世に存在するコレクションをすべて数  
え上げるのはおそらく不可能だ。しかも、個人蔵のコレクションは売却されることもあり、  
それにとまって散逸、あるいは合本される可能性が高い<sup>34)</sup>。つまり、この文書は世界中に  
散っており、実数が不明なのだ。ただし「膨大な」ことだけは確かである。

つまり、歴史的一次資料として貴重でありながら、この文書をコーパスとするには選択的  
に何点かの文書を抜き出してコーパスとするしかない。しかしながら、抜き出すにしてもど  
こに行けば何があるのかわからないのが現状なのである。

それでも、1980 年代の後半に二人の研究者がマザリナード文書を対象にした研究を発表  
し、文書の存在は注目されるようになった。クリスチャン・ジュオー Christian Jouhaud に  
よる『マザリナード：言葉によるフロンド』*Mazarinades : la Fronde des mots* (1985 年)<sup>35)</sup>  
とユベール・キャリエ Hubert Carrier による『フロンドの乱 (1648 - 1653 年) の出版  
物：マザリナード文書』*La Presse de la Fronde (1648 - 1653) : Les Mazarinades* (全 2 巻、  
1989 - 1991 年)<sup>36)</sup>である。ジュオーの著作は、マザリナード文書をコーパスとした歴史社  
会学的考察である。ジュオーは「言葉が行為である」という発想に基づいて、それらの文書

が「何をしたか」に注目した。コーパスとしてのマザリナード文書に対する、まったく斬新なアプローチであった。しかし同時に「この本は、マザリナード文書全体を論じる研究ではない。そうではなく、いくつかのマザリナード文書に関する研究である」という但し書きも忘れなかった<sup>37)</sup>。5,000 もの文書の集積について、彼はこう告白する。「全部を完璧に分析しつくすのに、人の一生で足りるかどうか、私には見当もつかないのだ」<sup>38)</sup>。一方、キャリエはまず徹底してコーパス全体の精査に時間を費やした。988 ページの大著は国家博士論文であり、フロンドの乱とマザリナード文書との関係性を、主要人物、党派、出来事について考証しながら、同時に当時の出版事情、流通経路、著者、購買者など、多様な視点を導入しつつ、マザリナード文書と「世論」の形成をひとつの歴史的出来事として記述したものである。この著作が、「マザリナード文書とは何か」に関しての現在私たちが得られるもっとも詳しい記述である。この著作でキャリエはフロンドの乱における世論の形成とこれらの文書の関係を明らかにし、続けて『戦う詩神たち』*Les Muses guerrières* (1996 年) により 17 世紀の文芸とマザリナード文書の関連を考証した<sup>39)</sup>。キャリエは次の課題としてマザリナード文書の総合目録の出版を予告しているが、まだ果たされていない。

これらの記念碑的な著作のあとに研究者が続けないのは、マザリナード文書が資料体としてまだ未整備であることが最も大きな理由である。しかしながら、この文書が人文科学研究のコーパスとして利用できるようなれば、高い学術的な価値をもつであろうことは疑いがない。まず第一に、これらの文書はフロンドの乱というフランスの国家基盤を揺るがすような事件の直接的証言である。

## 2-2 学術的価値

フロンドの乱は、ルイ 14 世 Louis XIV (1638 - 1715、在位 1643 - 1715) がまだ未成年であった時代に、王母アンヌ・ドートリッシュ Anne d'Autriche (1601 - 1666) が摂政となり宰相マザラン Jules Mazarin (1602 - 1661) が権力を握っていた時代に、戦費調達のための度重なる増税への反発をきっかけとして起きた内乱で、前半を「高等法院のフロンド」、後半を「大貴族のフロンド」と呼び習わしている。マザリナードという呼称は宰相マザランに由来し、宰相を揶揄する文書の呼び名が当時大量に流通したプロパガンダや民衆扇動の印刷物などの総称として使われるようになったものである<sup>40)</sup>。

フランスの歴史において大量の印刷物が出現した時期が3度あり、最初が16世紀後半の「宗教戦争」*Guerres de religion*、次が17世紀半ばの「フロンドの乱」、そして18世紀末の「大革命」*Révolution française* である。フロンドの乱はグーテンベルグ Johannes Gutenberg (1400 ごろ - 1468) が活版印刷の実用化に成功してからちょうど 200 年後の出来事にあたる。このように大量の印刷物の出現は、それ自体がひとつの歴史的出来事として注目に値する。マザリナード文書はフロンドの乱の直接的証言であると同時に、この動乱の一部を構成する

ものでもあるのだ。

書物史の観点からしても、マザリナード文書は当時の出版・印刷の制度、また印刷物の消費の動向を明らかにする上で重要である。フロンドの乱では対立する陣営がさかんに相手を攻撃するために印刷・配布を行った。王権の強化に抵抗する大貴族の中には、お抱えの文士をもつものもあった。プロパガンダの戦略をそこに探するのは大変興味深い。それだけでなく、マザリナードの書き手の中にはのちに文学史に名前を残す文人が多く含まれているのである。たとえば『回想録』*Mémoires* (1717) で知られるレ枢機卿 Jean-François-Paul de Gondi, cardinal de Retz (1613 – 1679)、『箴言集』*Réflexions ou sentences et maximes morales* (1665) のラ・ロシュフーコー公爵 François VI de La Rochefoucauld (1613 – 1680)、『ロマン・コミック』*Le Roman comique* (1651 – 1657) で笑いをふりまいたスカロン Paul Scarron (1610 – 1660)、『月世界旅行記』*Histoire comique : contenant les états et empires de la Lune* (1657) を書き、ロスタン Edmond Rostand (1868 – 1918) の小説のモデルにもなったシラノ・ド・ベルジュラック Cyrano de Bergerac (1619 – 1655) などが有名である。スカロンの場合にはまさしく『ラ・マザリナード』*La Mazarinade* (1652) という題名のマザランを攻撃する詩を書いており、このタイトルが総称的に使われるようになったと考えられている。そしてこの詩の形式ビュルレスク burlesqueこそ、当時大流行の叙事詩をパロディ化した文芸ジャンルのスタイルなのであり、この形式がマザリナード文書の約4分の1を占める<sup>41)</sup>。つまり、マザリナード文書とは17世紀の政治と文芸の場が重なっている特殊な空間に生まれた言説なのだ。文芸における表現の問題と政治的ディスコースという観点からもアプローチが可能なコーパスなのだ。

マザリナード文書は短いものは1枚だが、最も長いものは700ページを超す。壁に貼られたり、街頭で配られたものもあったが、多くは行商人の呼び売りや本屋の店先で売られていた。それは大量に消費された商品でもあったのだ。物品の流通の経路や都市生活の消費など経済史の面からも興味深い資料になる<sup>42)</sup>。一方、それを買い求め、消費した人々に目を転じれば、そこにはマス・メディアが産声をあげる前の、そして現代の私たちにまでつながっている、情報の消費者と世論形成に動員される公衆の姿が見えてくるはずなのである。

これらの文書が今日まで残ったのは、コレクターのおかげでもある。フロンドの乱の最中から、危険を覚悟で発禁になっている文書を買求める人々がいた<sup>43)</sup>。コレクションもまた受容のひとつの形態であり、装丁などの美しいものは文化史や美術史の関心と呼ぶだろう。

マザリナード文書の大まかな特徴を述べながら、この資料が潜在的に秘めている学術研究の対象となる可能性をいくつか考察してみたのだが、可能性はまだまだ広がっていきそうである。しかしながら、このコーパスが真の輝きを放つのはやはり17世紀研究においてである。それは先にみたアルタメーヌ・プロジェクトとの関連性においてあきらかだ。これらの文書が世に出たフロンドの乱の年代(1648 – 1653)は、『アルタメーヌ、あるいはグラ

ン・シリユスの物語』10巻が書かれ出版された年代（1648 – 1653）とまったく重なるのである。そもそもこの長大なバロック小説の主人公アルタメーヌのモデルは、フロンドの乱の後半（大貴族のフロンド）の中心人物、王位継承順で最も有力な大貴族コンデ大公 Louis II de Bourbon, prince de Condé であるといわれているのだ。400人近くになるこの小説の登場人物の中にはフロンドの乱の人物と重なるところが必ずあるはずである。アルタメーヌ・プロジェクトが目標とするようにこのバロック小説を「同時代のテキストの総体との関連において考察する」ところまでゆくには、マザリナード文書とのリンクが何重にも必要になってくるはずだ。このように隣接するのコーパスをつくることは、他の研究課題を助けることにもつながり、相互に影響しあって結果的に研究成果の充実がもたらされるのである。

マザリナード文書は『アルタメーヌ、あるいはグラン・シリユスの物語』だけでなく、フランス古典主義文学の全盛時代を支えるラシーヌ Jean Racine（1639 – 1699）やパスカル Blaise Pascal（1623 – 1662）やモリエール Molière（1622 – 1673）やラ・フォンテーヌ Jean de La Fontaine（1621 – 1695）が生きた時代に流通した印刷物であり、彼らの作品と同様に17世紀の言葉によって紡ぎだされる空間をつくったものなのである。

### 2-3 Web上のマザリナード文書

それではWeb上でどれくらいのマザリナード文書が見られるのかGoogleで検索してみると16,600件がヒットする（2008年9月30日調べ）。しかしながらこのほとんどはマザリナード文書への言及か図書館の文献情報であり、マザリナード文書自体ではない。唯一画像で見られるのはドルドーニュ県のアーカイヴで、ここには28点のマザリナード文書が「展示」されている<sup>44)</sup>。そこでたとえばGallicaを使ってを探そうとしても、「mazarinade」を「テーマ (sujet)」のキーワードに入力したのでは出てこないのである。「題名 (titre)」に入れると12点がリストアップされる。けれどもGallicaの電子テキストには他にもマザリナード文書が含まれているのだ。たとえばシラノ・ド・ベルジュラックによるとても有名な文書 *Le ministre d'état flambé en vers burlesque* (1649) などである。だがそれは、シラノ・ド・ベルジュラックの名前を入力するか、タイトルを正確に入力しなければ探し出せない。Web上でマザリナード文書を読みたいと思っても、ほとんど不可能に近い状態なのである。だが、本論の前半で見たように、マザリナード文書のように大量のデータこそ、Web環境に適しているのである。では、どのようなデザインがこのコーパスにはふさわしいのだろうか。

すでにふれたように、マザリナード文書はさまざまなコレクションとなって、世界各地に散っている。大学などの研究機関や図書館が所蔵しているものは、いずれデジタル化されてそれぞれのサイトで公開されるだろう。それらのデータベースをリンクでつないでいくことによって、マザリナード文書のアーカイブ化は可能なのだ。しかし、フロベールのサイトがそうした網の目の中心でありかつ入口であったように、マザリナード文書の仮想アーカイヴ

にも同様のサイトが必要である。それにはデジタル化したコレクションがひとつあればいい。そのコレクションを核として、リンクを広げていけばいいのだ。その第一候補として、もっとも近い場所にあるコレクションがこの夏、デジタル化を終了した。東京大学所蔵のマザリナードコレクションである。ここで「もっとも近い」というのは、核になるサイトとしての準備が最も進んでいるという意味と、私たち日本の研究者にとっては物理的に近いという意味をもっている。

#### 2-4 東京大学所蔵マザリナードコレクション

東京大学本郷キャンパスの総合図書館にマザリナードコレクションがあることは、これまでほとんど知られていない。1978年にアムステルダムの書籍商デッカー&ノルデマン書店 Dekker & Nordemann から 40,500,000 円で購入したもので、装丁された 43 巻と桐箱ひとつからなる。約 2,700 点の大型コレクションである。仲介に入った書籍商丸善に残る記録によると、以前の持ち主は「ベルンシュタイン氏 (Mr. M. Bernstein) の後妻であったモニク・ロラン夫人 (the late Mrs Monique Rollin)」ということであるが、それ以上のことは総合図書館でもわからなかった。筆者は 1995 年から、このコレクションの由来、文献情報などの調査に着手し、その成果をまとめたものが 2006 年に学位取得論文として東京大学に提出された『マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション』である。1140 ページ 5 巻のうち、4 巻がカタログを作るための基礎資料に相当する文献情報とコンコルダンスである。

この調査はトゥール大学ルネサンス高等研究所 le Centre d'Études supérieures de la Renaissance de Tours のプロジェクトとして、ユベール・キャリエが進めていた「マザリナード全文書の歴史的・批評的目録」と連動している。なぜならこのプロジェクトでは 2000 点を超すコレクションはすべて調査の対象になったからである。このたびの調査で東京大学コレクションには日本にしか存在しないか、あるいはブリティッシュ・ライブラリーと東京にしかないなど希少価値の高い文書が数点発掘された。またマザリーヌ図書館の協力を得て、装丁の特徴から不完全ながら由来がある程度解明できた。希少性の高い文書と由来については、2009 年 6 月にフランス国立図書館と密接な連携をもって稀覯本の知識を提供している国際愛書家協会 Association internationale de bibliophilie (AIB) の会報に掲載されることになっている。こうして少しずつではあるが、これまでほとんど知られていなかったコレクションが海外に紹介できるようになった。その一方で、国内では学習院大学を通じて 2008 年度の科学研究費補助金 (課題番号 20903010) を受けることができ、コレクションのマイクロフィルムがデジタル化されることになったのである。スキャンが終わった画像は現在切り出し作業中で今年度内には文書ごとの画像ファイルとして利用できるようになる。東京大学コレクションをデジタル化し、Web で利用できるコーパスにする「マザリナード・プロジェクト」

はすでに始動しているのだ。

## 2-5 マザリナード・プロジェクトの理念と構想：開かれたコーパスをめざして

このコーパスの中心となるのはマザリナード文書の画像とテキスト・ファイルである。フロベールのボヴァリー・プロジェクトで草稿の転写が必要であったように、マザリナード文書の場合も人の手による転写が必要だ。OCRでテキストに変換することができるのは全体のわずかな量にすぎないだろう。ただし、草稿の場合と違って、問題は17世紀フランス語特有の綴りの異同があることだ。ボヴァリー・プロジェクトの場合に、転写が終わった原稿はすべてフロベールの研究者が綿密にチェックを入れたように、17世紀のフランス語の知識をもっている研究者の協力が必要である。そして新しいコーパスの構築に立ち会おうという意欲をもった研究者、学生、そして研究機関に属さない一般の人々の参加を強く促すべきであろう。なぜなら、このように一般の参加を募ることによって、ボヴァリー・プロジェクト以上に学際的な交流に発展する可能性があるからである。マザリナード文書は、先に述べたように歴史、文学、社会、経済、政治、文化の交差点であり、そえゆえに様々なアプローチの方法がある。だが、関心はもっていても、原資料を参照するのが物理的に困難であったがゆえに、あるいは自分の専門から少し離れていると考えて諦めてしまった研究者も少なくないのではなからうか。できるだけ多くの人に開くことは、潜在的な研究者の発掘にもつながっていくと考えられるのである。参加者は日本国内にいる必要はない。インターネットを使えば地球上のどこにいても一緒に作業できるからである。

また、マザリナード文書の場合、一般の参加には、フロベールの場合とはまた別の期待がかけられる。それは研究機関に属さないコレクションの発掘である。歴史的にマザリナード文書はコレクターによって今日まで伝えられてきた経緯がある。個人の所有者は自分のコレクションを公開していない場合が多い。もし、コーパスが開かれれば、そうしたコレクターからの接触も考えられるのだ。研究のためには、物質的にその文書を所有する必要はない。「情報」として提供されるだけでよいのだ。そこには未発見の文書につながる機会がある。開くことがコーパスをより充実させる方向に導いていくのである。

転写が終わったテキストは、校訂作業を経て、最終的には注釈をつけ、文献情報と一緒に公開されることになるだろう。タイトル、ページ数、出版地、印刷業者の名前など基本的な書誌情報も手入力になる。すべての作業が終わってから公開するのでは遅すぎるので、基本的な情報を載せて順次サイトにアップし、そのあとも情報を加えたり、あるいは訂正することになるだろう。その場合にも、Webはたいへん便利である。絶えず更新し、最新の研究成果を反映できるからだ。

これらの核となるデータ・ベースのほかには、歴史年表や百科全書的な記述も必要である。他のデータ・ベース、図書館の目録とのリンクは欠かせないだろう。リンクにおいてはフロ



ベールのサイトで学んだように「特化して、網羅する」ことが重要である。

## おわりに

ウィキペディア Wikipedia の登場は、学生がコピー・ペーストしてレポートを仕上げるようになったために大学関係者にはたいへん評判が悪かったが、いろいろな人が書き込むことができる参加型の百科事典という発想は斬新なものであった。最近では記述の管理も充実してきたようであり、Web 上での市民権を確立しつつあるのではないかとさえ思われる。この Wikipedia を支えているのが Wiki という文書を書き換えることが可能なシステムである。知識の集積は、あらためていうまでもなく、個々の研究者において日々行われていることである。たいせつなのはそうして個々の内部に蓄積していく知を正しい方法で共有することではないだろうか。Wiki のようなシステムは、その共有を加速する。そして共有されることによって、科学的認識はさらに前進する。サイトの更新というのはまさにその前進を表している。Web 上に新しい形態のコーパスを作るという試みは、その共同作業を通じて、おそらくこれからの研究方法を模索するためのひとつの実験場を提供するのではないだろうか。同時にそれは、広く一般に開かれることにより、人文科学研究の社会的還元モデルともなりうるだろう。努力を自らに約束しつつ、本論文の結論にさせていただく。

## 註

- 1) 以下、註の中の URL は 2008 年 9 月 30 日現在のものである。サイト側で URL の変更があった場合に備えて、本文中には、検索用のキーワードになるように、できるだけ固有名詞には原綴を併記した。  
コデックス・シナイティキユス・プロジェクト : <http://www.codex-sinaiticus.net/en/>
- 2) ページの構成の解説 : <http://www.codex-sinaiticus.net/en/project/edition.aspx>
- 3) 転写に関して : <http://www.codex-sinaiticus.net/en/project/transcription.aspx>
- 4) BNF による Gallica2 プロジェクトの紹介 : [http://www.bnf.fr/pages/zNavigat/frame/catalog.htm?ancre=num\\_masse.htm](http://www.bnf.fr/pages/zNavigat/frame/catalog.htm?ancre=num_masse.htm)
- 5) Google ブック検索 : <http://books.google.co.jp/intl/ja/googlebooks/about.html>
- 6) プロジェクト・グーテンベルグ : [http://www.gutenberg.org/wiki/Main\\_Page](http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page)
- 7) BNF の使命 : <http://www.bnf.fr/pages/zNavigat/frame/connaitr.htm>
- 8) La charte documentaire de Gallica : [http://www.bnf.fr/pages/infopro/numerisation/po\\_chartegallica.htm](http://www.bnf.fr/pages/infopro/numerisation/po_chartegallica.htm)
- 9) ABU : <http://abu.cnam.fr/>
- 10) ATHENA : <http://un2sg4.unige.ch/athena/html/athome.html>
- 11) <http://abu.cnam.fr/INFO/>

- 12) <http://un2sg4.unige.ch/athena/html/merci.html>
- 13) <http://www.atilf.fr/frantext.htm>
- 14) *TLF, Dictionnaire de la langue du 19e et 20e siècle*, CNRS Gallimard, Paris, 1971 – 1994.
- 15) TLFi, Trésor de la langue Française informatisé : <http://www.atilf.fr/atilf/produits/tlfi.htm>
- 16) メゾン・ド・バルザック : [http://www.paris.fr/portail/Culture/Portal.lut?page\\_id=6837](http://www.paris.fr/portail/Culture/Portal.lut?page_id=6837)
- 17) コンコルダンス : <http://www.paris-france.org/Musees/balzac/kiriu/concordance.htm>
- 18) 『人間喜劇』初版テキスト : <http://www.paris-france.org/Musees/balzac/furne/presentation.htm>  
このページの右側「Comment nous citer」をクリックすると、Webで公開されているテキストを引用する際に典拠をどのように記載したらよいか例が挙げられている。今後、こうした引用は増えると思われ、たいへん参考になる。「Comment nous citer」: <http://www.paris-france.org/Musees/balzac/furne/citer.htm>
- 19) ブリュネの語彙統計的研究 : <http://ancilla.unice.fr/~brunet/BALZAC/balzac.htm>
- 20) Dumas père, deux siècle de littérature vivante : <http://www.dumaspere.com/>
- 21) ル・モンド紙などの批評 [http://www.dumaspere.com/pages/divers/presse\\_site.html](http://www.dumaspere.com/pages/divers/presse_site.html)
- 22) デュマの会について : <http://www.dumaspere.com/pages/societe/sommaire.html>
- 23) フロベール : <http://flaubert.univ-rouen.fr/>
- 24) 運営について : [http://flaubert.univ-rouen.fr/a\\_propos.php](http://flaubert.univ-rouen.fr/a_propos.php)
- 25) Question 7 : [http://flaubert.univ-rouen.fr/questions\\_reponses/](http://flaubert.univ-rouen.fr/questions_reponses/)
- 26) ボヴァリー計画 : [http://flaubert.univ-rouen.fr/bovary/atelier/transcriptions/projet/0\\_projet.htm](http://flaubert.univ-rouen.fr/bovary/atelier/transcriptions/projet/0_projet.htm)
- 27) 参加者のリスト : [http://flaubert.univ-rouen.fr/bovary/atelier/presentations/0\\_noms.htm](http://flaubert.univ-rouen.fr/bovary/atelier/presentations/0_noms.htm)
- 28) アルタメヌス : <http://www.artamene.org/>
- 29) アルタメヌス・プロジェクトの目的について : <http://www.artamene.org/projet.php>
- 30) こうした環境の変化に対応するため、また最先端の技術やコンセプトを使って、21世紀の文学研究の方法論を議論するシンポジウムが2005年にフランスで開かれた（「L'Internet littéraire Francophone（インターネット上のフランス語圏文学サイト）」2005年8月13 – 20日, Colloque de Cerisy）。コンピュータを誰よりも早く文学研究に取り入れたパリ第3大学の研究グループ、ユベール・ド・ファレーズ Hubert de Phalèse の提案で、ミシェル・ベルナール Michel Bernard（パリ第3大学）とバトリック・レボラル（南山大学）が組織したこのシンポジウムはノルマンディーの域で1週間かけて23人の発表が行われた。日本からはバルザック研究の霧生和夫（埼玉大学）、澤田肇（上智大学）が参加し、本論の中で紹介したフロベール草稿研究のダニエル・ジラル、イヴァン・ルクレール（ともにルーアン大学）、アルタメヌス・プロジェクトのクロード・ブルキ（ヌーシャテル大学）、Frantextに参加した第一世代のアンリ・ベアール Henri Béhar（パリ第3大学）や語彙統計研究のエティエンヌ・ブリュネなどが発表している。このシンポジウムはインターネット上の人文科学研究の状況を明らかにすると同時に、これまでの足跡を歴史化する有意義なものであった。本論の筆者は

- このシンポジウムを聞く機会を得て、あらためて1990年以降の私たちを取り巻くWeb環境の変化に驚きを覚えるとともに、次世代型の人文科学研究のコーパスについて具体的に考察するきっかけ与えられたものである。このシンポジウムの詳細と発表要旨：<http://www.berlol.net/ILF2005.htm>
- 31) 《mazarinade》という単語は、フランス語で使用されるときに、大文字で始める場合と小文字で始める場合で意味が異なっている。大文字のMazarinadeはこの名称で呼ばれる文書の総体、小文字のmazarinadeはひとつひとつの文書を指す。
- 32) Hubert Carrier, *La Presse de la Fronde (1648 – 1653) : Les Mazarinades*, Genève, 1989, t. 1, p. 71.
- 33) マザリヌ図書館：<http://www.bibliotheque-mazarine.fr/mazarinades.htm>
- 34) Carrier, *Ibid.*, p. 12 – 14.
- 35) Christian Jouhaud, *Mazarinades, la Fronde des mots*, Paris, Aubier, 1985.
- 36) Hubert Carrier, *La Presse de la Fronde (1648 – 1653) : Les Mazarinades*, Genève, Librairie Droz, 1989-91, 2 vol.
- 37) Jouhaud, *Ibid.*, p. 17.
- 38) Jouhaud, *Ibid.*, p. 17.
- 39) Hubert Carrier, *Les Muses guerrières. Les Mazarinades et la vie littéraire au milieu du XVII<sup>e</sup> siècle : courants, genres, culture populaire et savante à l'époque de la Fronde*, Paris, Klincksieck, 1996.
- 40) マザリナードという名称の由来、定義については拙論で網羅的に検証している。あわせてご参照いただきたい。『マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション』（東京大学、2006年博士学位取得論文、全5巻、1,140ページ）第2部第4章「《mazarinade》語義の変遷」p.162 – 178.
- 41) Tadako Ichimaru, "Les fonctions du burlesque dans les Mazarinades — Analyse de *La Mazarinade* de Scarron", in *Langue et Littérature Françaises*, No 72, 1998, pp. 3 – 16.
- 42) Carrier, *op. cit.*, t. 2 p. 286 – 295.
- 43) Carrier, *Ibid.*, t. 2 p. 316 – 349.
- 44) <http://www.perigord.tm.fr/archives/gutenberg/mazzarin/mazarin.htm>

## Summary

Mazarinades Project : Open corpus of Mazarinades for the profit of research and humanities.

This paper contains considerations about a change in the method to build and use a corpus in humanities. We take the example of a work-in-progress corpus by digitalizing a library collection of "Mazarinades", permitted by a governmental grant. First, we consider and analyze the Web research environment in French literature and humanities to reveal and comment its history since the beginning of the Internet.

By describing the digital corpus of the French National Library and several literary research

homepages, we emphasize the hard fact that some of the best advanced and popular homepages are using an open chart, giving a part to anyone interested in the project and applying the rules. Then, we focus on the interest to develop and provide a world open corpus of Mazarinades for the profit of research and humanities.

**Keyword** 【Internet, Corpus, digitalizing, Mazarinades, Humanities】